

命が望むこと

雪に覆われた1月であっても、時に陽の光が降り、幾分気温が上がって雪の嵩が少なくなると、春分に向かって少しずつ真冬の底を抜け出しつつあるという安堵感に満たされる。昨年の冬よりも確かに降雪量は少なく、吹雪に見舞われる日も多くはないように思われる。

新しい年が明けて、もう1か月が過ぎた。この1か月の間に、年が明けてすぐに3年生のSUSが始まり、1, 2年生のSUS、数理探究クラスのイングリッシュキャンプ、3学期始業式、実力テスト、大学入試センター試験、2次試験出願と大きな行事、出来事が立て続けにあった。3年生は、センターで獲得した得点をもって、いよいよ2次試験での勝負となる。3階への階段に張り出された後輩たちの激励ポスターをしっかりと受け止めて、これまでの蓄積を信じ、さらに力を伸ばしながら、最後まで粘り強く頑張り抜いてほしい。

この正月に、我が家にいるペットによって命について考えさせられる事があった。以前は父が飼っていた今年で16才になるシーズー一犬を引き取って4年になるが、昨年の暮れあたりから急に老いが進行したようで、視力がほとんどなくなり、1日の大半を眠って過ごしているソファにも、食餌の後は戻れなくなって右往左往するようになった。年が明けて、さらに状態が悪化して衰弱し、動物病院に連れて行って血液検査をしたものの、はっきりとした原因は分からずに、感染症の疑いがあるという程度で、太い注射をされはしたが状態ははかばかしくなかった。犬としては随分と長生きもしたので、老衰によるものだろうと半ば諦めていた。



それでも食餌を取るためによりよるとよろけながらもどうにか立ち上がり、ふらふらになりながら、えさに向かって歩いていく。ようやくえさにたどり着いて、カリカリといくつかのドックフードを噛み砕き、水を飲んで飲み下す。その間もふらついてしまう体をかろうじて短い足で踏ん張って支え、えさを食べ続けようとしている。

おそらくは老衰によってそれほど長くは続かないかも知れない命を、懸命になってつなごうとしている小さな動物は、命の本質はなにかということ、身をもって教えているように思われた。こんな小さなやせ衰えた老犬でも、命は懸命に生きようとしている。命は生きたがっている。命の本質は、何があっても生き延びようとするということなのだ。私たちは生きたがっている命をなんとしても生かしていかなければならない。今の命をつなぐために懸命の努力をしている小さな老犬を見ながら、そんなことを考えた。

私たちが命をもっている。自分の命を全力で生かしていかなければならない。命は生きることを渴望している。それが、命のもっている本源的な在り方なのだ。そして、さらに、私たちは人間であり、その命をどのようにも生かしていくことができる。命を何かのために使うことができる。生きることを渴望する命はまさに「生命」であり、命を使うということは「使命」ということである。

生きたがっている命を精一杯に生かし、その命を使って私たちが為すべき事を為していく。本高生の一人一人が、懸命に命を生かし、輝かせ、その命を使って、自らの使命に生きていく、そんな生き方の始まりの年であってほしいと願っている。